

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 石川 俊介

論 文 題 目

諏訪大社御柱祭の文化人類学的研究

—祭礼の存続と民間信仰—

論文審査担当者

主 査 名古屋大学 教授 阿部 泰郎

委 員 名古屋大学 教授 羽賀 祥二

委 員 名古屋大学 准教授 佐々木重洋

委 員 名古屋大学 准教授 東 賢太郎

委 員 中部大学 教授 和崎 春日

論文審査の結果の要旨

【本論文の概要】

本論文は、長野県の諏訪大社において六年周期で行われる式年造営祭礼として、諏訪地域全体で催される御柱祭を対象として、祭礼当事者の各種実践から「祭礼」という社会的営為を論じようと試みた研究である。論文は、序論と第一部（1・2章）、第二部（3・4・5章）から構成される。

序論は、御柱祭の民族誌的記述により、その全体像を描き出したものである。諏訪大社と御柱祭の歴史を概観したうえで、御柱祭の各行事、特に御柱を担当する各地区の準備過程と氏子組織について、その役割分担、御柱抽籤式、曳網製作、練習や祭事日程などについて記述する。諏訪大社は、上社（本宮・前宮）と下社（春宮・秋宮）から成る。その最大の神事である式年造営大祭として、御柱祭は、各社の境内四隅に縦の巨木を立てる御柱建てを中心に、同時に宝殿を造替する宝殿遷座祭を行いつつ、その前段階の用材の見立てから始まり、伐採、山出し、里曳きなど複雑な準備過程を、各社毎に四本、計十六本の御柱曳行を分担する各地区の氏子集団が籤によって順番を定めつつ競合して遂行する。上社と下社の御柱は、「メドデコ」と呼ぶ曳行用の支柱をもつ上社と、樹皮を剥ぐ下社のそれに代表される、各種の差異を示しており、それぞれの地域社会の特徴も反映させながら、大規模な組織を形成して、その準備から遂行、総括に至るまで、大社における神事と併行して運営される。また当日は、地域全体にメディアにより実況中継まで行われる様相が叙述される。

第一部では、御柱祭の存続への当事者の対処について、“伝統認識”と祭礼をめぐる“暴力”への認識という二つの視座から、行事の継承をあらしめる要因について考察する。1章は、祭礼への必須要件であり最大の課題である御柱の用材調達を、資源の不足により旧来の伝統的調達地から新たな調達地に求める近年の動向に、儀礼上の実践において宗教的伝統を継続する現象を見いだす。

2章は、御柱祭をめぐる常に付きまとう“暴力”の問題を、社会的には祭礼の存続を脅かす否定的要因であると同時に、御柱祭に欠かせないと期待する欲望との二律背反をとらえて、当事者の言説のうえで死者の発生を噂として語ることによって、実際の暴力行為を排除する一方で、暴力的イメージが共有されていく共同体のメカニズムを論ずる。

第二部では、御柱祭を成り立たせる氏子の諸活動における“民間信仰”について論ずる。特に祭礼の焦点である御柱をめぐる、氏子がこれを「神」として認識するに至る実践を、祭礼を構成する諸位相から三つの事例を取り上げ分析を行う。3章は、祭礼全体において歌われ、御柱をめぐる囃される木遣り唄と、その唄い手の伝承を提示し、それが祭礼の過程で如何に運用されるか、実践に臨んでの歌詞のテキスト解釈を通じて、御柱が山の神として降臨する過程が生成することを論じた。4章は、御柱というモノをめぐる氏子の信仰としての諸実践を論ずる。御柱の製作上に生ずる各種木片が護符や記念物など信仰対象として扱われ、造替後に生ずる「古御柱」も多様に活用され信仰対象やその媒体となることから、更にあらたな御柱行事を生み出す場をもたらすことを指摘した。5章は、御柱祭の中でも近代に創り出された下社の木落とし行事を、その成立と発展の要因に注目する。御柱曳行路の変化から生じた「木落とし坂」での木落としが、新聞報道などメディアと「御柱男」の活躍を機に外部の評判や介入を喚起し、やがて儀礼性を帯びた神事の一環となる過程を辿り、そこに発現するスペクタクル性に、あらたな御柱祭の理念やイメージが託されていくことを指摘する。

全体として、御柱祭を当事者として担う氏子集団の、自立的で多様な社会との接点のうえに、絶えず変化に対応して解釈を生成し続ける儀礼実践の集合体として論じている。

論文審査の結果の要旨

【本論文の評価】

諏訪大社の式年祭礼として諏訪地方をあげて催行される御柱祭は、神道祭の範疇を越えた大規模な儀礼と祝祭の複合であり、日本の民俗文化伝統の特質を表象する祭礼として知られる行事である。本論文は、この御柱祭の近代から現在に至る変遷を追跡し、その構成要素を多方面から照射して、行事の全体像を一篇の民族誌として記述し、かつこの祭儀が提起する文化人類学上の諸課題について探究を試みたものである。本論の視点は、御柱祭の、地域社会集団により巨木を山より引き出して建立する営為を中心に、それをめぐる集団的熱狂と、反面の、山林からの用材の調達に始まる各氏子組織の高度な役割分担による自律的な集団統制や、各行事の派生的な側面も含めた競合と協働によって成り立つ文化創出に置かれている。それらは、御柱祭を扱った従来の研究では、いずれも部分的に捉えられるに過ぎなかった。しかもこの祭が諏訪信仰という全国的にも独特な宗教風土と深く結びついた行事であるが故に、原初的信仰や縄文文化の遺風などとする恣意的解釈が地域主義と結びついて流通し、本格的な人文学の対象とすることが容易ではなかった。本論文は、それらとは一線を画する御柱祭の総合的研究である。

序論では、民族誌記述の前提として、歴史研究の成果を踏まえ、中世に信濃国の平均役として課せられた諏訪大社の式年造替の祭儀が一旦廃された後、近世に高島藩の許で再構築された造営事業と、その執行の為に動員された各地区の役割分担から御柱曳行の機構が形成していった経過、近代の幕藩体制の崩壊により自立を余儀なくされた神社側で、氏子集団が分担して執行するに至った歴史の変遷を的確に要説する。更にそのなかで形成された地区毎の氏子組織の役割分担から準備段階、催行される各行事にわたって、総合的に御柱祭の全体像を描き出している。この多面的な記述により、それまで一面的に切り取られて本質化されることの多かった御柱祭は、通時的座標の許で歴史的な変化の所産として認識され、また共時的な組織と行事の体系、および表象において構築されたものであることを民俗動態の許に位置付けた。これらは、従来に無い画期的な御柱祭の全体記述であるといえよう。

本論では、前半で祭を存続させるための戦略としての儀礼実践を、御柱の用材確保の為に新たな企てと、祭に伴って絶えず語られ流通する“暴力”の言説において、この祭儀が蔵し発現するところの、象徴生成の運動や、犠牲を求める心性の源流を捉えようと試みる。後篇では、「民間信仰」という範疇を設定し、祭礼に関する諸位相の行事を「風流行事」と命名してその過程を詳細に記述分析し、その機能するに依じて御柱の〈聖性〉が生成発現する様相を具体的に検証する、意欲的な考察を行う。それらの儀礼を構成する音声所作、モノへの意味付与、神事創出などはいずれも宗教テキストの体系と機能分析として有効であり、それらがより自覚的かつ有機的に論じられてあれば、一層、大きな成果を伴って御柱祭の普遍的意義の解明に貢献したであろう。これら後半の所論においては、「民間信仰」以下理論化のための概念が十分に検討されておらず、文化人類学の研究動向を必ずしも踏まえていると言い難い議論が散見される。また、都市祭礼論の解釈枠組みを援用しているため、山林、農村、街道など多元的な性格を有する地域祭礼の分析には適切でない点など、論述に改善を要するところがある。しかし、これらの欠陥も今後の更なる調査研究の進展に従って是正されるだろう。

本論文は、全体として、御柱祭が今なお変容と展開を止めない多様な解釈行為を喚起する文化創出の場であることを示し、今後の研究基盤を提供した業績と認められる。よって博士（文学）学位論文にふさわしい水準に達していると、審査委員は全員一致して判定した。